

令和 5 年 4 月 26 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13257

研究課題名（和文）ビデオ通話を活用した即興型と準備型の方法の違いがスピーキング力と不安に及ぼす影響

研究課題名（英文）Skype-based Video Chat to Improve Speaking Skills and Reduce Anxiety in Scripted and Unscripted Lesson Groups

研究代表者

小林 翔（Kobayashi, Sho）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10821647

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：即興的な英語でのやり取りや、学校のICTの活用が求められている中で、効果的にICTを活用して即興的な英語スピーキング能力を育成することは急務である。この研究では、ビデオ通話を活用し、即興型の方法と準備型の方法を用いて比較検証した結果、英語が得意な学習者だけでなく、苦手意識を持っている学習者においても海外の参加者とビデオ通話に繰り返し挑戦させることで、即興的な発話に慣れ、スピーキング不安の軽減とスピーキング力の向上につながることを期待できることがわかり、1対1のビデオ通話を取り入れるのは望ましいことが示唆された。研究の成果は、論文や国内外の学会で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、特に以下3点が挙げられる。(1) 1対1のビデオ通話を活用することで、即興的に英語でやり取りするきっかけになり、英語に苦手意識を持っている学習者でも実践が可能であることが明らかになったこと。(2) 原稿を準備してから英語でやり取りする方法よりも、1対1のビデオ通話の指導形態で即興的にやり取りすることを繰り返すことで、不安の軽減やスピーキング力の向上を促進することが明らかになったこと。(3) 一斉指導の指導形態においても、ビデオ通話を活用することで、海外の教室と日本の教室を繋げて即興的にやり取りを経験させることで、スピーキング力と学習意欲の推移に与える影響が明らかになったこと。

研究成果の概要（英文）：In the midst of the growing demand for impromptu English communication and the use of ICT in schools, there is an urgent need to effectively use ICT to develop impromptu English speaking skills. In this study, we compared and verified the use of improvisational and preparatory methods using video calls. As a result, we found that not only learners who are good at English but also learners who are not good at English can get used to improvised speech, reduce speaking anxiety and improve their speaking ability by repeatedly challenging them to participate in video calls with participants from overseas. The results suggest that it is desirable to incorporate one-on-one videocalls. The results of our research have been published in papers and at international conferences.

研究分野：英語教育学

キーワード：ICT ビデオ通話 オンライン英会話 スピーキング 即興性 やり取り 情意面 不安

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学習指導要領の外国語では、小中高一貫して、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付け、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成や、伝え合うやり取り、即興性のあるスピーキング力の向上が求められている。さらに、学校の Information and Communication Technology (以下、ICT) 環境の整備を後押しし、ICT を活用した英語スピーキング力の向上が求められている (文部科学省, 2017a, 2017b, 2018)。しかし、これまでの中学校や高等学校のスピーキング活動では、教師側で会話文を統制して、練習の後に会話活動を行うことが多く、スピーキングテストを行う場合、あらかじめ原稿を準備させ、練習させてから行うスピーチテストの形態をとることが多い (茅野・峯島, 2016) ことが指摘されており、英語の学習場面では、やり取りや即興性を意識した言語活動が十分提供されているとは言えない。特に、即興的に英語でやり取りすることに対しては、生徒が感じる不安だけでなく、教師も指導に対する不安が要因となって、指導が疎かになっている懸念もある。その結果、今でも、話すことに対する不安が要因となって、やり取りや即興性を意識した言語活動が不足している状況 (茅野, 2018) のままである。学習不安といった情意要因は個人要因の 1 つで、言語習得に大きな影響があることが指摘されている (Ellis, 1994)。Horwitz, Horwitz, and Cope (1986) では、リスニングとスピーキングが不安の大部分を占めており、特に自由会話において不安感が増大すること、不安な状況では能力を発揮しにくいこと等が指摘されている。しかし、学習者がクラスメートの前で個人のパフォーマンスを行う必要のない、脅威のない環境であれば、リラックスし、不安が軽減され (Crookall & Oxford, 1991)、適度なリスクや、あいまいさに耐えさせたりする (Oxford, 1999) ことや、活動に精通し、課題を達成すればするほど学習者はスピーキングに対してリラックスし、その成功体験が学習者の不安に大きな影響を与えることが示されている (Yalçın & İnceçay, 2014)。そこで、目標言語の文化圏の人々や文化等の接触量が増えると不安が少なくなる (Aida, 1994) ことや、視聴覚を併用する学習など個人的に目立たない学習には抵抗感がない (北条, 1996) ことを踏まえ、ビデオ通話を活用し、発話機会を増やし、即興で話す力を育成する指導法を提示する。一般的に、スピーキングテストと不安感に負の相関がある (Young, 1986) と言われているが、視聴覚教材を用いた 1 対 1 のビデオ通話を継続的に施すことにより、即興的スピーキングに対する不安の克服、スピーキング力の向上が期待できるケースもあると考えられる。そのような結果が得られた場合は、その結果に寄与した要因を分析することにより、より効率の良い指導をすることができる。次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめのポイント (文部科学省, 2016) には、「特に課題がある「話すこと」「書くこと」において発信能力を強化する言語活動を充実する」ことが求められている。生徒自身のスピーキング不安の根源は、準備なしの状況下において、英語で即座にやり取りする練習不足に関連している。そこに焦点を当て、継続的な即興的なスピーキングの場を提供し、スピーキング不安の変化やスピーキング能力の伸びを観察することは、今後のスピーキング指導、特に話すこと[やり取り]の指導に大きな示唆が得られる研究となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ビデオ通話を継続的に実施することで、どの程度即興的発話の機会を促し、スピーキング不安とスピーキング力にどのような影響を及ぼすかを検証することである。英語の母語話者と非母語話者との 1 対 1 のビデオ通話を授業に取り入れた日本における研究に、Ryobe (2008) があり、ビデオ通話がコミュニケーション能力の向上やそれへの強い動機づけとなっていることが示された。グループでのビデオ通話の研究では、英語でコミュニケーションを取ることへの自信がつく (小早川他 2012) ほか、スピーキング技能向上と不安軽減に効果的であることを示唆している研究がある (遠山・森・新谷 2017)。しかし、1 対 1 のビデオ通話における即興的発話とスピーキング不安の関連に焦点を当てた研究は見あたらない。そこで、本研究では、1 対 1 のビデオ通話を活用し、原稿を準備するグループと準備しないグループに分けて、その前後で指導の効果を比較検証し、その成果の検証を試みた。さらに、一斉指導下の状況においてもビデオ通話を活用して海外の教室と日本の教室をつなぎ、1 対 1 だけでなく、グループにおける即興的に英語でやり取りする効果を検証した。

3. 研究の方法

初年度では、大学生の参加者を募集するとともに、ビデオ通話を提供している会社と写真描写を題材にした教材を選択した。また、スピーキング不安に関する質問紙及びスピーキングテストの作成を行った。次年度は、年度当初にガイダンスを実施し、その後は準備型と即興型の各グループを設定し、ビデオ通話を一か月間計 8 回実施した。参加者にはスピーキング不安に関するアンケートとスピーキングテストをビデオ通話の実施前後に実施し、集めたデータを分析し、準備型と即興型の効果を測定し、比較検証した。3 年目には、英語に苦手意識を持っている学生を対象に、即興的に英語でビデオ通話を実施し、半構造化インタビューと刺激再生法を用いて意識の変容とスピーキング力の変化を質的に調査した。最終年度では、大学生だけでなく、小学生も対象に参加者と同年代の参加者がいる海外の教室と日本の教室をビデオ通話で繋ぎ、英語による国当てクイズの活動や、学校紹介の発表を通してオンラインでの異文化交流を実施し、交流前後

の英語に対する認識の変化やスピーキング力を調査し、研究全体のまとめを行い、その成果を学会で発表した。

4. 研究成果

本研究を通じて、ビデオ通話に繰り返し取り組むことで、熟達度に関わらず不安を軽減し、スピーキング力を向上することが示唆された。特に、即興的に英語で取り組むことで、その効果が促進される可能性があることがわかった。図1の左図では、準備型と即興型の群間比較を図で表したものである。図1の右図では、海外の講師とのオンライン英会話の様子を表している。不安軽減に役に立った要因としては、1対1の指導形態による強制アウトプットや、ICT機器の機能の1つであるチャット機能とグループワークが足場掛けになって意味交渉を促進させ、成功体験に繋がることが判明した。

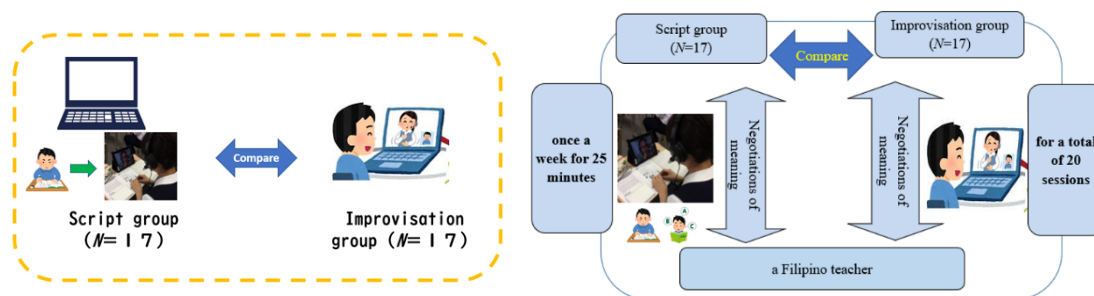


図1. 1対1のビデオ通話における即興型と準備型の比較

また、英語に苦手意識を持っている学生を対象に図2のように、1対1のビデオ通話の様子を全て録画し、質的に調査した。その結果、英語に苦手意識を持っている学生でも、ビデオ通話を活用した同期型の環境で、即興的に英語でやり取りすることに慣れさせることで、意思疎通ができたという成功体験を積み重ね、英語でやり取りできる自信をつけることがわかった。さらに刺激回想法から、講師からのフィードバックが発話や意味理解を促進し、講師の発話例が足場かけとなること、慣れるにしたがってアウトプットが相手に伝わった成功体験が不安の軽減、スピーキング力の向上につながることを確認された。英語が得意な学習者だけでなく、苦手意識を持っている学習者においてもビデオ通話に挑戦させることで、即興的な発話の機会を提供でき、スピーキング不安の軽減とスピーキング力の向上につながることを期待できるので、1対1のビデオ通話を取り入れるのは望ましいことが示唆された。

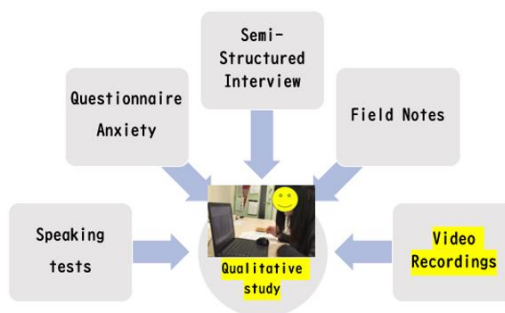


図2. 英語に苦手意識を持っている学生の質的調査

また、1対1のビデオ通話だけでなく、一斉授業の状況下においてもグループでのビデオ通話が可能であり、カメラ機能やチャットボックス等のビデオ通話の特徴を生かした即興的な英語でのやり取りは、小学生から大学生まで様々な校種の英語学習者に適用可能であることがわかった。図3は、小学生を対象とした研究であるが、自由記述の回答の計量テキスト分析の結果、英語で相手と話し合う楽しさや相手を意識したコミュニケーションの大切さに気づき、異文化に対する理解を深め、英語学習への意欲を高めることが示された。



図3. 教室対教室の場面におけるビデオ通話の活用例の様子

これまでの生徒が即興的発話に抵抗感を感じてきたことにより、教員が事前に生徒に準備をさせてから英語で話をさせる準備型の指導スタイルの現状を、ビデオ通話を活用することで変えることができた。つまり、生徒の心理的障壁を取り除くためにこれまで行ってきた「話す内容の準備をさせてから英語を話す方法」から、「その場で話す内容を考えながら即興で話す方法」への指導の転換を図れた。その結果、即興で話す学習機会が増え、スピーキングに対する不安を軽減させ、話す力（やりとり）のスピーキング力向上に貢献できることがわかった。今後は、英語に苦手意識を持っている幅広い参加者を対象に、同期型の ICT だけでなく、同期型に比べ不安を引き起こしにくい非同期型の ICT にも着目し、同期型と非同期型の活用が有効に機能するための効果的な ICT のアプローチ方法を考察・提案する。また、不安だけでなく、その他の関連する情意面（WTC、国際的志向性）と、スピーキング（やり取り）の観点から調査し、効果を促進させるための条件を明らかにする。

<引用文献>

- Aida, Y. (1994). Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *The Modern Language Journal*, 78(2), 155–168. <https://doi.org/10.2307/329005>
- 茅野潤一郎. (2018). 「即興的スピーキングに対する意識と学習経験—英語中級レベルの大学生の場合—」 『中部地区英語教育学会紀要』 47, 17-24. https://doi.org/10.20713/celes.47.0_17
- 茅野潤一郎・峯島道夫. (2016). 「日本人英語学習者は即興的発話でどのように時間を稼ぐか」 『中部地区英語教育学会紀要』 45, 1-8.
- Crookall, D., & Oxford, R. (1991). Dealing with anxiety: Some practical activities for language learners and teacher trainees. In E. K. Horwitz & D. J. Young (Eds.), *Language anxiety: From theory and research to classroom implications* (pp. 141–150). Prentice-Hall.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford University Press.
- 北条礼子. (1996). 「外国語(英語)学習に対する学生の不安に関する研究(6)」 『上越教育大学研究紀要』 15(2), 45–506.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 125–132. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.1986.tb05256.x>
- 小早川悟・ジョセフ ファラウト・福田敦・アレックス フィローン. (2012). 「スカイプを用いた海外大学生とのコミュニケーションによる科学技術英語教育」 『平成 24 年度 ICT 利用による教育改善研究発表会発表要綱』, 42–43.
- 文部科学省. (2016). 『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめのポイント』 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_3.pdf.
- 文部科学省. (2017a). 『小学校学習指導要領 外国語活動・外国語編』 開隆堂出版.
- 文部科学省. (2017b). 『中学校学習指導要領 外国語編』 開隆堂出版.
- 文部科学省. (2018). 『高等学校学習指導要領 外国語編 英語編』 開隆堂出版.
- Oxford, R. L. (1999). Anxiety and the language learner: New insights. In J. Arnold (Ed.), *Affect in language learning* (pp. 58–67). Cambridge University Press.
- Ryobe, I. (2008). The effects of Skype-based video chats with volunteer Filipino English teachers (II): Discovering the superiority of video chat. In *Proceedings of the WorldCALL 2008 Conference* (pp. 120–123). The Japan Association for Language Education and Technology.

- 遠山道子・森一将・新谷真由. (2017). 「オンライン英会話グループ学習を用いたスピーキング技能と心理的要因の改善—英語リメディアル教育への適用に向けて—」『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』 1, 37–59.
- Yalçın, Ö., & İnceçay, V. (2014). Foreign language speaking anxiety: The case of spontaneous speaking activities. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 116, 2620–2624. <https://doi.org/10.1016/j.sbspro.2014.01.623>
- Young, D. J. (1986). The relationship between anxiety and foreign language oral proficiency ratings. *Foreign Language Annals*, 19(5), 439–445. <https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.1986.tb01032.x>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小林翔	4. 巻 5
2. 論文標題 原稿を準備しない方法と準備する方法の異なる指導法の違いがスピーキングの不安軽減に与える効果-ビデオ通話の比較検証-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 外国語教育メディア学会関東支部研究紀要 (5) 17-38 2021年4月15日	6. 最初と最後の頁 17-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24781/letkj.5.0_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林 翔, 古屋 雄一朗, 中川 右也	4. 巻 40
2. 論文標題 インターネットを介したコミュニケーション活動への参加条件の違いが小学生の英語スピーキング力と情意面に及ぼす影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 児童英語教育学会紀要 (JASTEC)	6. 最初と最後の頁 199-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林翔	4. 巻 32
2. 論文標題 英語でのスピーキングに対する抵抗感の変化: ICTを活用した協働型国際交流に焦点をあてて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国英語教育学会研究紀要 (ARELE)	6. 最初と最後の頁 161-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林翔, 古屋雄一朗, 中川右也	4. 巻 21
2. 論文標題 小学校児童のスピーキング力向上とコミュニケーションをしようとする意思の育成を目指したビデオ通話の実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小学校英語教育学会JES Journal	6. 最初と最後の頁 4-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KOBAYASHI Sho	4. 巻 9
2. 論文標題 Comparison of a Videoconferencing Intervention's Effects on Students' English-Speaking Anxiety	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2020 IEEE International Conference on Engineering, Technology and Education (TALE) Proceedings	6. 最初と最後の頁 530-535
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1109/TALE48869.2020.9368401	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林翔	4. 巻 39
2. 論文標題 オンライン英会話学習によるスピーキング不安と意識の変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 89-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林翔	4. 巻 34
2. 論文標題 ビデオ通話を活用したスピーキング力向上と不安軽減を目指した実践報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関東甲信越英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 45-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林翔	4. 巻 69
2. 論文標題 即興的スピーキングに対する中学校教員の意識 教員研修後のアンケート結果からー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要(教育科学)	6. 最初と最後の頁 243-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 KOBAYASHI Sho, NAKAGAWA Yuya
2. 発表標題 Fostering Speaking Ability and Willingness to Communicate in a Low-Proficiency English Learner: A Case Study Using Video Calls
3. 学会等名 1ST AEJ UKI SLA RESEARCH CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林翔, 中川右也, 茅野潤一郎
2. 発表標題 eTandemプログラムが英語学習者に及ぼす影響
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 コロナ禍のオンライン国際協働学習を考える～海外協定校とのオンライン交流授業を例として～
3. 学会等名 茨城大学 グローバル教育センター主催シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 Comparison of a Videoconferencing Intervention 's Effects on Students ' English-Speaking Anxiety
3. 学会等名 An International Conference on Engineering, Technology and Education (IEEE TALE2020)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 小学校児童のスピーキング力向上とコミュニケーションをしようとする意思の育成を目指したビデオ通話の実践
3. 学会等名 小学校英語教育学会 全国大会岐阜大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 The Effects of Skype-based video chat on Students' Unwillingness to Speak English in Scripted and Unscripted Lesson Groups
3. 学会等名 FLEAT 7 : International Conference on Foreign Language Education & Technology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 スカイプを活用したやり取りがスピーキング力と不安に与える効果 準備型と即興型の比較
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会 (KATE) 第43回神奈川研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 スカイプを用いたオンライン英会話学習によって上級学習者に見られるスピーキング不安と自己効力感の変容 事例研究
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林翔
2. 発表標題 意欲を高める英語指導実践 小中高大の現場から
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関東支部第143回(2019年度秋季)研究大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小林翔、江尻友也、山田奈未、狩野晶子、久松功周、草間浩一、清田洋一、宮崎貴弘、山辺恵理子、金谷憲、稲井達也、吉田充宏、門前和紀、箱守知巳、萩野一郎、久保野りえ、山本耕平、奥住桂、武藤克彦、内田浩樹、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 104
3. 書名 英語教育5月号 今日の授業を明日につなげる学習・指導の振り返り 「できる」を実感 児童生徒の振り返りを動機づけにつなげる工夫	

1. 著者名 猪井 新一、齋藤 英敏、小林 翔	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 学級担任が創る小学校英語の授業	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>茨城大学 教育学部 学校教育教員養成課程 教科教育コース 英語教育教室 https://info.ibaraki.ac.jp/Profiles/104/0010381/profile.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------